慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本文明史, 大川周明著
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.3 (1922. 5) ,p.119(469)- 121(471)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220500-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東西新史乘

日本文明史（大川周明著　大鐙閣發行）

歴史が單に事實の羅列でなく、選擇され解釋されたる事實の綜合統一でありとせば、歴史家の尊むべきはその歴史觀である。即ちかかる選擇の原理、解釋の根據となる歴史家の人生觀及び世界觀である。いま紹介せんとする大川周明氏著日本文明史は、著者の歴史觀の强烈鮮明にうかがひ得られるものとして、最近に公にされた國史中いちぢるしき特色と興味とを有する。即ち本書は、一日本國民の精神に潜める『日本』の内容を時間の秩序に從つて通俗的に解説せるものである（序文六頁）。而してこの一日本國民はさかんなるアジア主義鼓吹者であつて、熱烈火の如きその主張は書中多くの諸篇に迸るのを見る。まづ本書の内容紹介にあたつて本書の中心精神をなすところの著者のアジア主義の如何なるものかを檢する必要がある。

著者言ふ。亞細亞は渾然たる一如をなして、西洋文明と相對する東洋文明を成して居る。固より東洋文明は異れる國土に於いて異れる表現をなしてゐるが、しかもそれらは、皆な一つの大洋に起伏する男波女波にすぎぬ。亞細亞諸國の總ての文明は、皆な統一ある亞細亞を物語る（八頁）。しかるにその亞細亞が從來ヨーロッパのために壓服支配され、『戰前に於ける所謂亞細亞問題は、貪婪なる歐洲列强が如何に地上の亞細亞を彼等の間に分配するかの爭ひであつた』（三九〇－一頁）。が、そのヨーロッパは今や世界戰爭の結果沒落に瀕し、その文明はゆきつまつた。而して現在世界史を經緯しつつある二問題は、一方において各國家内における階級爭鬪であり、他方において國際間における民族爭鬪であるが、その階級爭鬪は富者に對する貧者の宣戰として現はれ、その民族爭鬪は白人に對する非白人の反抗として、更に具體的にはアジア復興の努力として現はれた（三九〇頁）。而して今日吾等の抱懷し得る最大の希望は、復興の亞細亞と革命の歐羅巴との融合であつて、このことが來るべき世界史の經緯であるならば、その第一頁を書くものは日本でなければならぬ。東西一切の要素を抱擁する日本の魂から若し日本が眞個に自覺して、獨創的に考へ且つ行ふならば、必ずや新しき或るものが生れるであらう。この神聖なる業のために、日本國民はその身體と内體との全力を用ゐねばならぬ（四〇六頁）。

以上が著者の思想の概觀である。著者は書中アジア主義といふ語を使用してゐるのではない。けれどもその思想を壓搾すればアジア主義に歸するのである。そしてそのアジア主義を更に約言すれば復興アジアである。けれどもこれに對して多くの疑問が湧起する。まづ第一に著者の所謂アジアなる語そのものが、吾等にはまことに曖昧にひびく。普通地理學において學ぶところのアジア

は印度の西方小アジア地方をもふくむのであつて、世界最古の文明がこの地方に發生したることをきく。もしアジアを地理的意義に解するならば、この地方に發生したるバビロン文明、ユダヤ文明、及びサラセン文明もアジア文明のうちに包含されねばならぬ。しかるにこれらの文明は渾然たる一如をなして西洋文明と相對立したるものではない。著者は儒教及び佛教をもつてアジア人文の至寶、アジア思想の兩極となし（一八頁）、キリスト教や回教をアジア文明より除外せるかのやうである。從つて著者の言ふアジア文明は地理的意義のものでないかの如く思はれる。けれどもそは嚴然とヨーロッパに對立するものとなされてゐるのである。そのかぎりにおいてあくまで地理的意義であらねばならぬ。地理的意義である以上、儒佛兩教以外の他の文明をも包含せざるを得ず、從てそは渾然たる一如をなしたとは言へない。よしアジア文明を儒佛兩教の二大思想にかぎることを許すとするも、これが旺盛なる生命に攝取され完全なる發達を遂げたのは、全アジアにおいて日本あるのみである。けれどもこれをもつて直ちに、『吾等の今日の意識は、實に亞細亞意識の綜合である。吾等の文明は全亞細亞思想の表現である』となすことはできない。更に復興アジアをもつて、白人に對する非白人の反抗を意味するに至つては、一層その明確を缺くであらう。

アジア主義提唱の根據は、過去におけるアジア文明の點よりも、現在アジアの政治狀態に基く方が強くあるらしい。著者は現在アジアにおいて最も勢力を振へる英米のアングロサキソン民族に對する反感を極めて強烈に吐露し（三六九－七〇）、そして埃及より支那に到るまでの各地方において、單に政治的獨立のみならず、精神的獨立を要求しつつあることをのべてゐる（三九七）。けれどもここに注意せねばならぬ。弱小民族に對し眞の救濟策を提示せずして、單に反抗の德を教ふることは、その民族をして一層の不幸に陷らしむることなきか。更に注意せねばならぬ。アジア主義といふ美名のかげに、日本自身の貪婪な帝國主義的野心をおしかくしてゐはしないか。たゞ日本のためのアジア主義であるならば、回教民族も支那人も日本に失望するよりは、むしろ日本を敵視するに至るであらう。こは現在一部支那人にみらるる心理である。われらも感情において所謂白人先進國の或る行狀に對し、すくなからざる不滿を持するものであるが、全人類生活の發展において軍國的侵略主義と國際的協調主義と果していづれが眞の幸福をもたらすものであらうか。

つぎに著者に問ひたきは革命ヨーロッパの意義である。ヨーロッパが社會主義的革命に進みつつあることをのべ、露國革命の成功と進步とをもつて來るべき形勢の鮮明なる豫兆ありとなし、且つボルシエヰキ政府の事業に對する確信と勇氣とを稱揚しつつ（三九四－五）、他方において社會主義を明かに斥けてゐる。しからば著者の求めんとする革命ヨーロッパはいかなる內容を有するものであるか。

更に著者は將來の日本の使命をのべて、『日本は非白人解放の戰士として、其の魂の眞個の光を輝かさねばならぬ。……吾等において日本改造は直ちに是れ世界改造の爲である』となし、その期する所は、『實に理法の具體的實現としての國家』を建設するに

あるとしてゐる。即ち國家の目的を人類の道德的完成に認め、人間の道德的本性は國家のうちに其の最高眞實の實現を見るとなせるプラトーの思想に依立するのである(三八七頁)。けれどもかかる目的は、現實の國家に果して求め得らるるものであらうか？プラトーの所謂國家は理想國家であつて、換言すれば神の王國にひとしい。それ故かかる國家が現實の日本に實現さるるものとは到底思考されず、もし實現されたとすれば、そはもはやわれらの日本ではないであらう。

以上の所論は主として最後の章、即ち『第二維新に面せる日本』、『世界戰と日本』、及び『世界史を經緯しつつある二問題』についてであるが、實にこの部分は著者の思想の最も鮮かに躍動せるところであり、從つてまた本書の最も著しき特色をなしてゐる。著者は自ら史學專攻の門外漢でありとなし、この一卷にあつめられた諸篇を學術的價値を有する研究の發表でないと斷つてゐるが、われらも本書の他の部分において、特にいちぢるしき見解に接しないうらみさへ感ずる。またその研究範圍の狹少なことも文明史としては甚だ不滿である。がここにわれらの全然同感するところは、德川幕府における政治家が、眞實の政治家たる資格として必ず哲學並びに史學を修めねばならぬと考へたるに、今の政治家が全くこれを顧みず、時としてこれを嘲笑の的となせることに對する滿腔の不滿と不服とを吐ける點である(二五一―二頁)。人類生活の眞の理解を得るためには、現實と理想とに徹しねばならぬ。而してそは史學、哲學の志すところである。

現實批判にとぼしきわが史壇に、火のごときアジア主義を高唱し一貫せる主張によつて日本文明を評論せる著者の意氣はまことに壯烈である。過去の日本文明をかへりみ、將來の使命を思ふものは著者の思想に贊すると否とを問はず、一度は本書を繙くべきであらう。(松本芳夫)

軍事的批判　豐太閤朝鮮役(杉村勇次郎著　日本學術會發行)

こは本年一月に歷史講座の一として公にせられたものである。著者は曾て軍職にあつたが、偶ま閑を得たために、京都大學に入り、日本戰史を研究せられて居るのである。

さて著者は本書の序文に於て「本書は强て專門的講究に便するを圖ることなく、寧ろ專門以外の讀者に對し、通俗的に軍事知識を普及せんことを目途とし」たものであると云つて居る。其の內容の紹介に先ち、其の目次を擧げれば、第一緖論、第二準備、第三統帥、第四編制、第五兵數兵器、第六給養、第七水軍、第八明軍、第九韓國に就いて、第十媾和、第十一結論の十一章で、なほ附錄として、豐太閤朝鮮役經過表が終に附してある。

著者は朝鮮役の失敗の諸因を指摘論評せられ、先づ何れの役をとはず、各軍の編成に於ては其の指揮官の明示を必要とするに、本役に於ては、これを明示せざるの點をあげ、殊に平時に在りて對等相下らざる大名をして、一は指揮權を有し、一は其の配下に立たざるを得ざらしむるには、こゝに明確なる指揮權の附與を